北桐 58
HOKUTOH

岩手大学教育学部同窓会　2019

目　　次

表紙絵　「睡蓮」
盛岡市立黒石野中学校
3年　木　村　帆　花

巻頭言

伝統を維持し、前進
北桐会会長　小笠原　義　文……1

特　集

「私とフィギュアスケート」　佐　藤　洸　彬……2

桐の葉物語

脚下照顧　矢　吹　哲　郎……4
ふるさと　岩手　笹　沼　朋　広……5
岩手県で過ごした12年間を振り返って　國　井　郷　史……6
過去があるから現在がある　福　田　勝　雄……7
私の原点「書道科」　黒　澤　みほ子……8
縁　大　林　裕　明……9

キャンパス便り

「激動の中で」　大　森　響　生……10
―岩手のよさ―　塚　田　哲　也……10
学びの尊さ　一　條　友　希……11
「経験と学び」　藤　本　あおい……11

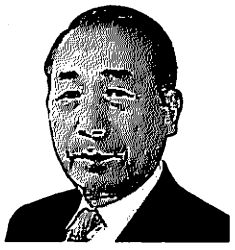
思い出

大学生活雑感　押　切　源　一……12
学習指導要領の欠陥が学力不振を、さらに、不登校を生む
―教員養成29年の私の結論―　重　松　公　司……12
「食べること」は「生きること」　菅　原　悦　子……13

事務局便り……14
会計報告……15
北桐会役員一覧……16
編集後記……17

[巻頭言]

かんとうげん●



伝統を維持し、前進

北桐会会長
小笠原　義　文

平成30年６月17日に開催されました、第５９回教育学部同窓会北桐会評議員会の役員改選において、黒川國児前会長の後任を仰せつかりました。学内において北桐会役員として行動していたことから推挙されたものと思います。先輩たちが作り上げた北桐会の組織を継承し発展できるよう務めますので、会員の皆さまにはご理解とご支援ならびにご協力をお願い申し上げます。

私は、昭和52年大学改組で教養部から名称変更となった人文社会科学部に任用された後、教育学部に配置替えとなり平成23年退職しました。全国各地で活躍する同窓生たちと連携を図りながら会則に基づいて、事業の継承発展・組織運営の整備、会報並びに会員名簿の発行（平成30年８月、第５版刊行）・会員及び準会員への活動援助等の項目に取り組んで参ります。

北桐会の会員は、教員免許状を取得している卒業生が大半であり、教職員に就かれる場合が多いのですが、ほかの分野でも活躍している方も多数おられます。そのお一人である、昭和52年（1977年）中学校教員養成課程国語科を卒業した若竹千佐子さんは、小説「おらおらでひとりでいぐも」で第158回芥川賞を受賞され、63歳の新人作家として大きな注目を集めました。千葉県木更津市在住で還暦を過ぎてから小説家の才能が開花されたことに、心から敬意と祝意を表したいと思います。人生の終盤に晴れがましいことが起きたことを謙遜して述べていましたが、今後も文壇における益々のご活躍を期待しています。岩手大学正門前等のフェンスには、お祝いの大きな横断幕が長期間掲げられて市民の注目となっていました。新聞等の報道で、その人物の活躍内容を紹介されるとき、岩手大学あるいは教育学部卒業という経歴を見聞きすることは、同窓生として大変うれしく誇りに思います。

大学卒業後も同じ学年、学科ならびに学友会等で目標に向かって活動を共にした仲間同士が交流を深めている同窓生も多いと思います。学芸学部甲二類を昭和35年に卒業した方々が学生時代を懐かしみ、数年置きに集合して旧交を温めておりました。この度、傘寿も過ぎて高齢にもなったことから、最後の同期会「甲二類・35会」を平成30年10月に開催しました。母校に感謝の意を表して、これまでの会費等の残金をまとめて、会報印刷発行協力費として寄付するので、出席されたい旨のご案内状をいただきました。寄付金総額は、甲二類35年卒業に合わせて、下３桁を235円にまとめていただいたご高配にも心から厚くお礼申し上げます。

会報の発行・発送協力費としてご協力いただくため、毎年発行されている同窓会報「北桐」には、ゆうちょ銀行の払込取扱票を挿入しております。会員の皆様からご寄付を賜り、経費として有効に活用させていただいていることに重ねてお礼申し上げますとともに、今後ともよろしくご支援下さいますようお願いいたします。

教育学部は平成28年、学部改組により生涯教育課程と芸術文化課程を募集停止にして、教員養成に特化した学校教育教員養成課程だけの定員160名となりました。学生定員の減少は同様に同窓会費も減額となり、北桐会の諸事業の縮小も余儀なくされているほか、学部学生数に準じて学内施設が割り当てられて教育学部２号館の一部は、理工学部（前の工学部）の教員研究室や実験施設に活用される予定です。

このような状況下ではありますが、先輩から受け継いだ北桐会の伝統を維持し、前進できるよう任務を遂行しますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。

（昭和43年　甲一類・体育科　卒業）

[特集]

「私とフィギュアスケート」

佐藤洸彬

私がスケートを始めたのは５歳の頃だと取材ではよく答えています。しかし、実際のところはどうだったのか定かではありません。気付いたら氷の上におり、気付いたら今現在に至っていたというのが正直な思いです。今回、「北桐」の執筆依頼をいただき、いざ執筆しようと自分というものに向き合ってみると、これまで私はあまり自分自身と向き合ってこなかったということに気づき反省するとともに、このような機会を与えてくださった「北桐」に感謝します。

スケートを始めた年齢は定かではないなら始めたキッカケも定かではないです。人にはよく「姉が先にスケートをしていて、それを見て楽しそうだったから」などと言っていますが、本当にそうなのかはもちろん覚えていません。しかし、キッカケが分からなくとも現在の私が形成されるのにスケートは必要不可欠な存在であり、スケートを通して学んだこと得たことはかけがいのないものであり、私にとってスケートと出会えたことは幸運であったということは間違いないです。

始めてから小学３年生までの記憶はあまり思い出せません。親が撮影したビデオの中では楽しそうに滑っているのが分かりますが、エピソードとして思い出せることはほぼありません。ただ思い出そうとするとよく浮かぶのはコーチの車中での光景です。当時、盛岡のアイスアリーナはシーズンリンクであり、10月下旬から３月までしか営業していませんでした。よって夏場の氷上練習は八戸や仙台に遠征に行っていました。その遠征はコーチの車にスケートクラブのみんなで乗せてもらい移動するので、その光景がよく思い出されます。

本当の意味でスケート選手になったのは小学４年生からだと思います。４年生になるとノービスという枠組みになり、初めて全国区の大会に出場できるようになりました。それまで出場していた県大会や北日本大会に出場するのとは訳が違いました。まず東北北海道ブロック予選を通過しないといけなかったのです。盛岡では周りに同い年の他の男子スケーターはいなかったですし、地方大会でよく一緒になっていたスケーターもほんの数人でしたので、自分のレベルが全国の同年代と比べてどうなのか、自分が何位なのかなど知る機会もなければ考えることもしていませんでした。よって、初めての全日本ノービスは衝撃的でした。このとき私の世界は大きく広がったように感じました。まず、自分が行ったことのない土地で試合をすることで空間的に世界が開けました。それまでは仙台や八戸など車で移動することが多かったのですが、新幹線に乗って電車を乗り継ぎ開催地まで行くという経験をすることで自分が知らないだけで、もっと世界は広いのだと感じたことを覚えています。また、多くの同年代のスケーターと出会ったことで社会的に世界が広がったように感じました。それまでは通っていた小学校でしか同年代の男子と交流できなかったのですが、自分が知らない場所で自分と同じくフィギュアスケートをやっている男子が大勢いるということを実際に見て会話することで、自身が認識する社会が「家族」「学校」「盛岡のリンク」だったのに「日本」が加わったように思います。またちょうどその頃、フィギュアスケートのルールが旧採点から新採点になったことでスケートの世界が広がりました。旧採点では演技全体に対して審判１人１人が6.0満点で採点していたのに対し、新採点ではジャンプ・スピン・ステップに細かい点数が付き、演技全体に対しても、音と合っているか、滑りは綺麗かなど詳しく採点されるようになりました。それまではなんとなく

全体が良く見えればいいと思っていたのが、１つ１つ技を見直し、演技全体を細かく考えなければならないという意識が生まれ、私のスケートへの考えが大きく変化しました。

初めて全日本ノービスに出場してから３年後の中学１年生、私は全日本ノービスで２位になりました。そして２位になったおかげで初めて海外に行くことになりました。全日本ノービスで上位入賞した選手は海外の大会に出場させてもらえました。私はフィンランドの大会に出場できることとなりましたが、そのときもう一度世界が広がりました。海外に行くことなんて初めてのことですし、とても興奮していたことを覚えております。長い時間飛行機に乗ることも広い空港も、大勢の外国人もよく分からない食べ物も品ぞろえの悪いコンビニめいた店も常に曇っている空も、初めてのことだらけでずっとワクワクしていました。当たり前のことですが海外にもスケート選手はおり、そんな選手と一緒に出場できたことでスケートを続けた先には世界があるのだと実感できました。また自分の演技が終わったあと、海外のお客さんからたくさんの拍手をいただいたことで演技には国も言語も関係ないのだと感じたことを覚えています。

高校生になるとそれまでお世話になっていたコーチがクラブを離れ、現在のコーチにお願いすることになりました。また初めて振付師の先生にお願いすることになりました。今までは前のコーチに振付していただいていたが、コーチが変わることもあり、また機会を作っていただいたのでお願いすることとなりました。その振付師さんには今年度までずっと振付をお願いしており、この時出会っていなければ今の自分のスケートはないと思えるくらいの最高の出会いでした。

高校３年生では進学をどうするか悩みました。岩手県内に残るか、県外に出て環境を改めるか、練習環境や金銭面を見直して考えていました。やはりこの先スケートを更に極めようと思ったとき、シーズンリンクしかない盛岡で続けるより通年リンクがある県外に進学したほうがよいのではないかと考えが、県内に残るという考えより大きかったと思います。しかし、決めなければならないという時に盛岡にも通年リンクができるという知らせが入ってきました。そうなのであれば、お金もよりかかり精神的にも1から慣れていかないといけない県外よりも、慣れ親しんだ盛岡で頑張っていきたいという思いが大きくなりました。そこでどの大学へ進学するかと悩み、学びたい事、通学へかかる時間、金銭面など考え岩手大学へ進学したいと決めました。

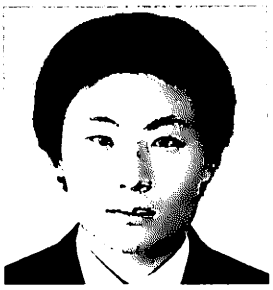
大学１年生で初めて全日本選手権に出場し、更に世界ジュニアに出場させていただきました。この時の全日本選手権では新人賞をいただき、とても嬉しく思いました。世界ジュニアでは初めてドーピング検査を受けました。試合後ということでなかなか検査を終えることが出来ず、１時間以上検査の部屋から出ることができませんでした。トップアスリートの方々はこれを毎回こなしているのかと思うと、とても尊敬できると感じました。自分もアスリートの仲間になれた気がしました。

大学４年生では初めてグランプリシリーズのNHK杯に選考していただきました。日本で開催されるグランプリということで取り上げられ方が他の試合と違うと感じました。特にオリンピックシーズンということもあり、会見や取材も多く、メディア全体がフィギュアスケートにも力を入れていると感じました。この熱がなるべく長く続いてほしいと思いました。

本年度からは大学を卒業し、大学院に進学しながらフィギュアスケートを続けさせてもらっています。今シーズンもNHK杯に出場しましたが、良い演技ができず悔しかったです。また全日本選手権にも出場しましたが、こちらもジャンプにミスが多く、結果を伸ばすことができませんでした。しかし、3月にロシアで開催される冬季ユニバーシアードに出場させていただけることとなりましたので、この大会で会心の演技ができるよう、更に努力を重ねていきたいと思います。これからも応援よろしくお願いします。

（平成30年　学校教育教員養成課程　卒業）

[桐の葉物語]



脚　下　照　顧

矢　吹　哲　郎

私は、一度岩手県内の教員となり約10年を経たのちに、岩手大学大学院に入学しました。この２年間は、自分自身の脚下を大いに見つめた日々であったと総括できると考えています。このことを念頭に、２年間の思い出の一部を綴ってみたいと思います。

まず、岩手大学の先生方の講義は、どれも自分の興味や関心を引くものばかりだったことが思い出されます。それぞれの分野の研究に立脚した様々な理論は、まさしく論理的で、自分自身に新しい見方や考え方を提供してくれました。何を問題として捉え、それらをどのような方法や手順で解決していくのかといった研究の筋道は、感動的だとさえ思えました。それと同時に、必然的に自分のこれまでの教育実践の意味を問うこととなりました。正直、浅はかな実践と言わざるを得ないものが多いことに気づかされました。

次に、たくさんの若い学友を得ることができたことです。大学は、本当に若いエネルギーに満ち溢れています。サークル活動に汗を流す若者。さんさ踊りの季節には、熱心に練習に励む姿を目にすることができました。(私は、どちらも参加しませんでしたが……。) 講義やゼミなどを通して、このような若い学生に出会うことができました。一心に夢を追いかける若者たちの言葉や行動に、はっとさせられることが多くありました。斬新な発想や想像力は、私には新鮮でしたし、学ぶべきことが多くありました。また、様々なことから謙虚に吸収しようとする姿勢にも、感心しました。忘れかけていた初心を思い出させてくれました。これから教育現場には、若い先生がたくさん入ってくると聞きました。私は、この二年間での経験から、若い人に学ぶ姿勢をずっと持ち続けていきたいと思っています。

さらに、あの３月11日の東日本大震災を、院生室で経験したことが挙げられます。遅い昼食を食べ終わって、論文をまとめていたちょうどその時でした。今まで経験したことがない大きな地震で、近くにあった辞典等が棚から落ちてきました。多くの人が一号館の前に避難していました。ラジオから聞こえる沿岸部の状況を知らせる「壊滅的」という言葉が忘れられません。私は、釜石の実家は大丈夫だろうかと気になりましたが、同じように沿岸部出身の学生たちは、それぞれのふるさとのことを心配していたのではないかと思います。津波によって、実家は流され、思い出の物は、ほとんどなくなりました。そして、家族とともに、今後のことについて深く考えました。大きな自然災害を経験し、自分で問うたり、幅広い視点で考えたりすることの重要性を改めて認識させられたように思います。大切な自分の生き方は、自分で決断する以外にないのです。

卒業後、仕事でも生活の上でも自分自身をふりかえって考えることが増えました。時に、そこにどんな意味があるのか、他にもっとより良い解決方法はないのかを考えて、答えのない暗闇に迷い込むことが多々あります。自分の脚下ばかりを見て、次の一歩を踏み出すことができず、つい暗い気持ちになりがちです。しかし「脚下照顧」は、脚下を照らして顧みることですから、明るい気持ちを失わないようにしていきたいと思います。

私にとって、大学院生としての２年間は、本当にあっという間の短いものでしたが、ここで大きな学びを得たことは間違いありません。これから、ここで学ぶ多くの学生たちにとって、自分と同じように有意義なものであることを願わずにはいられません。母校のますますの発展を祈り続けています。

(平成24年　教育学研究科国語科教育専攻　修了)

ふるさと　岩手

笹沼朋広

この度、北桐への執筆の機会をいただき、大変感謝しております。大学時代の様々な出来事が思い出され、懐かしさを感じると共に、これからの生活の励みとなりました。

大学を卒業し、教員として11年目が終わろうとしています。現在、地元栃木県の中学校で勤務をしております。学生の頃は、「教職５年目」「教職10年目」といった先輩方、先生方に会う度に、自分はあのようになれるのか、と思っていましたが、経験年数だけはもう過ぎてしまいました。仕事に追われる日々ですが、今の自分が在るのは、岩手大学で学ぶことができたからだと強く感じております。かけがえのない４年間であり、まさに岩手は私の「ふるさと」です。

何より充実した４年間を送ることができたのは、大学での素晴らしい出会いがあったからです。教師になることを目指し、入学して１年目、藤井知弘先生との出会いがありました。「初期ゼミ」という講座で、小学校の「現場」に私たちを連れて行ってくださり、授業を参観させていただきました。入学してから間もない私は、このような実践的な学びから「大学の授業」というものを体感することができました。そして藤井先生の下で学びたい気持ちが強くなり、藤井研究室を希望しました。

今でも自分の家の本棚に並んでいる１冊の本があります。藤井先生に教えていただき、ゼミの時間に初めて読んだ本。佐伯胖さんの「学びを問いつづけて」。なかなか読み直す機会がありませんが、目にすると学生のころのやる気を思い出させてくれる１冊です。そして、研究室に所属してからも、様々な学校現場を訪れ、学ぶことができました。また、多くの講演会にも参加させていただきました。４年生になってからは、小学校の一つのクラスに入り、一日子どもたちと過ごすという貴重な経験もすることができました。卒論の関係で、学生という立場でありながら、授業をさせていただけました。このような実践的な学びから、教師としてのやりがいはもちろん、教師としての大変さを実感できたことはとても大きなことでした。藤井先生が話されていたことの一つで「大学で学んでいることは、学生のうちは分からないことが多いかもしれないが、教師になってから分かってくることがある。」ということを思い出します。本当にその通りでした。先生から多くのことを学びましたが、何より先生御自身が教師としての立ち振る舞い、学ぶ姿を示されていたことが私にとって最大の学びでした。

そして、友人との出会い。岩手という初めての地に来た私にとって、友人たちと過ごした日々はとても新鮮でした。入学してすぐ出会ったパンション松岡の仲間。毎日部活のように集まり、楽しい時間を過ごしました。行動力のある友人ばかりで、様々な場所へ旅行にも行きました。おかげで私も少しは行動力が身に付いたと思います。

学部・学科の仲間とは、日々の授業や教育実習、教員採用試験に向けて切磋琢磨しながら頑張ることができました。同じ学部の仲間であるFC兆治のみんなには、フットサルに誘ってもらい、遊んだり酒を飲み交わしたり、そして学び合ったりと素晴らしい時間を共有することができました。志を同じにする友人達は、自分のことを高めてくれた大切な存在でした。

教師になってからもたくさんの人と出会い、支えていただいて今が在ります。経験年数を積んでも、新たな発見、学びの連続です。これから関わっていく全ての人たちのために働くことが「ふるさと岩手」への恩返しだと思い、努力していきたいと思います。

（平成20年　小学校コース国語科サブコース　卒業）

岩手県で過ごした12年間を振り返って

國 井 郷 史

新潟県の中学校教諭として勤務し、今年で４年目となりました。現在は、出身地である村上市の中学校で保健体育、数学の授業を担当しています。この度、「北桐」の原稿執筆依頼を受け、これまでお世話になった方々への感謝の気持ちをお伝えするとともに、自分自身を改めて振り返る機会をいただきました。拙い文章ではありますが、岩手県で過ごした思い出を振り返りながら、述べさせていただきます。

初めて岩手県を訪れたのはもう16年も前になります。受験前日に盛岡駅のホームに降り立った時の、凛とした空気を今でもはっきりと覚えています。翌日に控えた実技試験のために盛岡城跡公園を走りました。歩道に残った雪がさらさらと砂のような感触だったこと、見たこともない長さの霜柱、その日の夜、最低気温が－15度まで下がったこと、どれも自分が生まれ育った新潟県では経験したことがないものでした。その一つ一つが新鮮で、今でもはっきりと心に残っています。初めて訪れた岩手県は、私にとってすべてがとても魅力的に映りました。無事入学が決まり、パンションに入居した日、父が管理人さんに深々と頭を下げてから帰っていきました。「人に迷惑をかけるな」という父の教えを、この姿と一緒に何度も思い出しながら大学生活を過ごしました。長く地元で教員として勤めた父のもとに生まれ育った私は、いつも「國井先生の息子」でした。自分がいつどんなことをしても、それがついてまわりました。当時の私にとって、尊敬する父の存在は大きなプレッシャーでした。ここでは、先入観なしに自分を見て、関わってもらえる。それはまるで生まれ変かったような感覚になるほど、とても大きな変化でした。

学生として過ごした盛岡での４年間は、私の宝物です。授業を思い返すと、実技の時間は、運動が得意というわけではない私にとってどれも困難の連続でした。美しいお手本を見せながら、一緒に練習してくれた同級生、先輩、後輩の皆さん、的確なアドバイスをくださった先生方、一人で練習に行くといつも声をかけてくださった体育館の管理人さんの方々には今も感謝の気持ちでいっぱいです。運動の得意でない生徒に向き合い、指導する時に、当時の経験が生きています。できないことができるようになる瞬間の喜びを、どの生徒にも味わってほしい。コツをつかんだ瞬間の「わかった！できた！」という感動をみんなに感じてほしい。この想いは私の仕事に向き合う力の源です。教育実習で出会った生徒の皆さん、指導してくださった盛岡市立上田中学校の先生方、一緒に採用試験の勉強に取り組んでくれた仲間たちがいなければ、今の自分はなかったと思います。

部活動でも、貴重な経験をさせていただきました。心技体ともに大学レベルには程遠かった私を、それでもチームメートとして受け入れ、４年間一緒に汗を流してくれた仲間は、私にとって尊敬する大切な存在です。卒業時に顧問の鎌田先生からいただいた「雨垂れ岩をも穿つサッカーを糧に多くのサッカー仲間を育ててほしい」という言葉は、サッカーの指導に関わる際にいつも胸に浮かんできて、自分を励ましてくれます。本当に、一つ一つの出会いに恵まれ、支えられた大学生活でした。

初任校である一関市立一関中学校、二校目に勤務した一関市立大原中学校では、教員人生の基礎となる経験を積ませていただきました。美しく響く校歌、一人一人の生徒に誠心誠意向き合う先生方、そして、まっすぐにぶつかってくれた生徒の皆さんの存在は一生の財産です。岩手県で過ごした大学生活の４年間、教員として過ごした８年間は、私にとって沢山の方々から愛情いっぱいに育てていただいた、かけがえのない時間です。皆様からいただいた愛情を、これからは向き合う生徒一人一人に返していきたいと思います。そして、これから出会う人たちの幸せな人生の糧となれるよう、生きていきたいと思います。

（平成19年　学校教育教員養成課程　中学校保健体育科　卒業）

過去があるから現在がある

福　田　勝　雄

「家づくりは、家族の動線を考えること。例えば、子供が朝、学校に行く時に見送ることができて、学校から帰宅した時に迎えられるようにすること。」在学当時、自分将来の家を設計する課題の際、渡辺先生からいただいた一言だった。あれから、14年後、平成26年に私は自分の家を建てた。

特設美術科の環境デザイン研究室に在籍していたものの、ほとんど勉強せずに卒業してしまったので、14年ぶりに改めて家づくりについて勉強し直した。家の購入は一生に一度の大きな買い物であったため、失敗はしたくないという思いから、手当たり次第に雑誌を購入して勉強した。そして、在学当時にご指導いただいたことを一つ一つ思い出しながら15年ぶりに図面を描いた。

「花火の見える家」。在学当時のデザインコンセプトをそのままに、空間や家族の動線、子供の成長など考えて、家族の将来像を想像しながら図面と向き合った。子供が玄関から自分の部屋に行き来するためには、リビングを通らないといけないように設計し、家族が顔を合わせて挨拶が交わされるようにした。在学当時と同じように、肩幅60センチスケールの人型を用いて、人と空間の関係や空間と空間のつなぎ方を考えた。採光と遮光を考え、西日との関係ついても考えた。これらも当時、先生からご指導いただいたことだ。当時はあまり理解できなかったことも、今になって納得できるものばかりで、今更ながらもっと勉強するべきだったと後悔している自分がいた。

最近の岩大生は知らないと思うが、特設美術科は30名の入学定員があり、当時から一風変わった人の集団として周りから思われていた。大学１、２年生の時は、一般教養の履修の傍、絵画や彫刻、染織、写真など、美術全般を広く浅く、ひと通り学んだ。大学３年になって所属研究室を選択する際、元々絵画を専攻したいと思っていたが、デザインを選んだ。デザインというのは、自分の思った通りに表現する絵画分野とは全く異なり、自分の考えが万人に受け入れなければ認められないということを知り、自分の考えと他者評価の間で葛藤を抱く日々を送った。毎週のゼミでアドバイスを受けては、デザインを練り直し、修正箇所に対して更にアドバイスを受けることが繰り返された。思い通りに上手く行かない自分に対して苛立ちを感じた日々があった。あの時、根性や情熱を持って建築に対して真摯に向き合っていれば、また違う人生を歩んでいたのかも知れない。環境デザインは、インテリアデザインから景観デザインまでとスケールが幅広く、何をデザインするかは、本人に任されていたので、教育実習を終えていい気分になっていた私は、卒業制作として学校建築を選んだ。そのことが、今の道に進むきっかけになったのだと思う。

現在、盛岡に住み、盛岡の町並みを歩くたびに当時の事を思い出す。もりおか啄木・賢治青春館（旧第九十銀行本店）での内部調査やフロムハート（菜園の川徳交差点の向かい）の見学など、盛岡には当時の思い出のスイッチが点在している。長屋とその時代の風俗、宮大工の巧みな技、改めて見ると盛岡の街の良さを常に肌で感じられることを嬉しく思う。ふと旅行先などで建物に入ると、空間の創り方や光の取り入れ方、テクスチャーなどの視点で持って建物を見てしまう自分がいる。木の温もりや打ちっ放しのコンクリートの無機質な感じ、空間のカーブなどに心惹かれてしまう。これらも、環境デザイン研究室で少しでも建築に触れる経験ができたからこそだと思う。

（平成12年　特別教科（美術・工芸）教員養成課程　卒業）

私の原点「書道科」

黒　澤　みほ子

今年度、教育学部最後の書道専攻生が卒業すると聞き、帰る場所がなくなるようなさみしさを感じている今日この頃です。今後は人文社会学部に移行するとのことです。

私は、教育学部甲一類、つまり中学校教員養成課程書道科の卒業生です。中学校では、書写は国語科の中に位置付けられていますので、大抵の場合は、高校書道、国語の免許とともに中学校国語の免許を取得し、さらに小学校免許、養護学校免許を取得することもできました。そして、同級生は皆、それぞれ県内の高校、中学校、小学校の教員になりました。

大学受験の際、鮮明に覚えているのは、高校の書道部の先生に、これを並べておきなさいと小筆をお借りして臨んだことと、担任の先生に合格の報告をすると「小指の爪の先で引っかかったな」と言われたことです。ですから・・というわけではありませんが、大学に入ったら少しは真面目に勉強しようと決意しました。ただ、勉強と言っても、机に向かっての勉強ではなく、紙に向かって試行錯誤しながら書くという勉強です。自分の背丈よりも長い紙に書くことが多いので、狭いアパートではなかなか書くことができません。そこで、講義が終わる夕方から仲間と共に書道実習室で道具を広げ、運動着に着替え、大きな紙の上に乗って書き始めます。途中、研究室でそうめんやうどんを茹でて食べ、また書き続ける・・そんな生活をしていました。気づくと、夜中になっていて、守衛さんが巡回してきたりもしました。夏休みも冬休みもとにかく、書き続けました。書道といえば、おしとやかなイメージがあるのかもしれませんが、全くの体力勝負です。

年に一度、「書道科展」という展示会を県民会館で行うための合宿がありました。高松の池の畔の「高松亭」で、確か２泊３日だったと思います。しかし、正確には『0泊３日』です。寝ないで書き続けるからです。まだ若かったので、１日ぐらいの徹夜は大丈夫ですが、２日目の夕方になると、時々記憶が飛んできます。そして、３日目の朝を迎える頃には、意識が朦朧としてきます。しかし、ここからが大事なのです。１日目、２日目は、ここをこう書こうという「人工的に作る」感じから抜け出せないのが、意識が飛んでくると手が覚えていることが自然に表現されるのです。不思議なことですが、書いた記憶のないときに書いたものが変な力が入っていなくていいのです。作品ができると、展示するために今度は大学で表具の作業をします。自分よりも大きく重たい額をいくつも運ぶ仕事もありました。小学生に腕相撲で負けないのは、この時に鍛えられたからだと思います。

このように、大学時代は幸せなことに、書道にどっぷりつかって過ごすことができました。そして、今は亡き先生方に大変お世話になりました。特に「二類書写」でご存じの方も多い菊地先生は、書写・書道についての理論、技能、そしてそれに向かう姿勢、人としてどのように生きるべきかの全てにおいて親身になってご指導くださいました。その菊地先生が、大学を卒業するときに私たちに、「書く仕事を頼まれたら断らずにやりなさい」と言ってくださいました。賞状の名前を書くとき、掲示物を書くとき、看板を書くとき・・菊地先生のお顔を思い出しながら、少しでも皆さんのお役に立てるように、と思っています。また、人数の少ない書道科で同じ時代を過ごした同級生はもちろんのこと、先輩、後輩も、私にとって非常に大切な存在です。今もその気持ちは変わりません。これが「書道科」の絆なのだと思います。

私を育ててくれた書道科、帰る場所書道科がなくなってしまうのは、とてもさみしいことです。今後、人文社会学部でまた新たな歴史を刻むと共に、「手書き文化」の素晴らしさを次の時代の子ども達に伝えていけるようなシステムが続いていってほしいと願っています。

２月の「岩手大学書展」に行き、私の原点を確認し、また前に進みたいと思っています。

（昭和62年　中学校教員養成課程書道科　卒業）

縁

大　林　裕　明

【ばか者会】

大学４年の冬、卒業まで残り少なくなっていた頃、誰が発起人かは定かではないが、学内すべての運動部の４年生に声をかけ懇親会が企画された。会場は岩大生協２階で会費は２千５百円だったと記憶している。

当日は20数人集まっただろうか。競技もバラバラ、これまでお互いにあまり話をしたことがなかった者もいたわけだが、岩大でスポーツを頑張った者同士、会が進むにつれてどんどん盛り上がっていった。必然のように予算がオーバーし、追加で注文したお銚子が210本。最後はみんなべろべろの状態でお開きとなった。当時の写真がそれを物語っている。

それから時を経ること13年、岩大の同級生に声をかけて懇親会を行った。教育学部が多かったが、人社･工学･農学部出身者もおり20人ほど集まった。その会に出席していたK君が、「大林が現場を離れて、寂しくて飲み会をやったようだ」とまことしやかに話していたと後に聞いた。この年私は学校現場を離れたのは事実であるが、ことの真相は「大学４年時の生協べろべろコンパ楽しかったよね。あんな飲み会がまたできればいいね」という一部の声を受け企画したものであった。

この会の名前をどうしようかと考え、大学当時のコンパの様子から「ばか者会」との案もあったのだが、これでは品位に欠けるということで「岩手大学５７年卒有志の会」とした。（後に「やっぱりばか者会でよかったかも」という声も出ている）

平成６年に第１回目を行った「有志の会」、今年で25回目を迎えた。参加人数も12人～20人超と年によって違っているし、岩大卒ではないが縁のある者が出席したこともあった。

10周年、20周年には記念品も企画。本会員であり数学科卒で陶芸家という異色の経歴を持つ雪ノ浦裕一君に依頼し、ビールジョッキやマグカップを作ってもらった。さすがプロの技、大変好評である。

大学を卒業して37年、平成30年度末で定年退職となる同級生も何人かいる。「有志の会」がこれほど長く続くとは当初考えていなかったが、これも縁。30周年に向けて歩みを続けたい。

【フロア会】

平成13年10月、私は教職員中央研修の機会をいただいた。当時はまだつくばエクスプレスが開通しておらず、東京駅からバスで２時間半ほどかけて教員研修センターを訪れたことが懐かしい。

１カ月余りの研修で、同じ志を持った仲間との出会いが大きな財産となった。センター内宿泊棟の同じ階のメンバー（フロア会と命名）は10名で、小学校５名、中学校５名。出身地域は、東北以北は私だけで、関東から九州まで全国各地に縁が広がった。

日中は、教職専門に関する講義や著名な方々による興味あふれる講話など大いに刺激を受けた。ここで触れるべきは夜の研修。９時頃になると誰が声をかけたわけでもなくメンバーが階の中央にあるスペースに地酒を持って参集、さまざまな話に花を咲かせる。ちなみに私は「福来・鷲の尾・月の輪」などを振舞った記憶がある。連日連夜の研修によりメンバーの絆はますます深まり、今後もフロア会で再会することを約束しつくばを後にした。

記念すべき第１回は、翌年２月に大坂なんば花月前に集合し、吉本新喜劇を満喫。以来、東京・福岡・金沢・名古屋・神戸など幹事を交代しながら毎年集まりをもっている。

私も毎回参加できているわけではないが、いつか岩手でもフロア会をという思いが募り、平成26年11月に「平泉世界文化遺産と東日本大震災被災地を巡る旅」を実現、九州・四国をはじめ全国から６人の仲間が一関にやってきた。初日は中尊寺や毛越寺、厳美渓などを巡り、夜は［遠野産とれたてホップキリン一番搾り］で乾杯、２日目は、奇跡の一本松や気仙中などの震災遺構を視察して旅を終えた。平泉の荘厳さはもちろん、大震災から４年目の生の姿を伝えることができたと自己満足、遠い岩手の地まで足を運んでくれたメンバーに感謝いっぱいである。

フロア会発足時、10年は続けようという目標のもと回を重ね、節目の10周年は原点であるつくばの居酒屋で祝杯をあげた。今年で18年目を迎えるが、この縁がいつまでも続くよう皆が健康でいることを願うばかりである。

（昭和57年　中学校教員養成課程保健体育科　卒業）

[キャンパス便り]

「激動の中で」

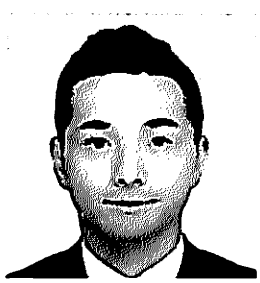
大　森　響　生
（学校教育教員養成課程
特別支援教育コース　４年）

岩手大学での4年間を思い起こすと、忙しくも充実した、本当にあっという間のことだったと感じられます。また、社会に目を向けてもこの4年間は激動の頃だったように思います。私は盛岡に生まれ育ち、高校卒業後も地元の岩手大学への進学を目指して、入学が決まった時にはワクワクして大学の正門をくぐりました。１、２年生ではコースの同期や先輩、サークルでの仲間などたくさんの出会いがありました。大学での出会いは小中学校のように単なる居住区で分けられるわけではなく、将来や趣味に関して同じ志を持った者同士が集まるため、時には喜びを分かち合い、時には本気で議論ができる、かけがえのない人達に出会えたと思っております。

生活もこれまでの決められた時間割ではなく自分のことは自分で決めなければなりません。講義は受けることもさぼることもできますが、その責任は自分で引き受けなければなりません。丁度この頃、改正公職選挙法により選挙権が18歳に引き下げられました。私も初めての投票を経験するなど、自分で考え決断しなければならない大きな出来事がいくつもありました。

そして、教育者として大きく学びがあったのはやはり3年生からの２年間でした。初めての主免実習にあたり、沢山の不安を抱えて初日に子どもたちと対面しましたが、教室に一歩踏み入れた瞬間に「わー！！」という子どもたちの歓声を受け、いつのまにか不安が消えていました。子どもたちのパワーってすごいのだと、一瞬で思い知らされました。それから１か月間、指導教官の教えを受けながら、全力で指導案、授業づくりなどを一生懸命に学び、最終日には涙が流れました。それだけただひたすらに過ごした、学び大きな1か月でした。

４年生になり、副免実習や教採の勉強をしながら「教師とは何か？」「私は本当に教師になりたいのか？」「私に教師が務まるのか？」と何度も自問自答していました。世間では平成が終わると騒がれ、これからの未来は「正解のない時代だ」と言われています。自分なりに“納得解”を見つけて進んでいくしかないのだと。これを読んでいる先輩方はそれぞれの答えをお持ちだと思いますが、私は今も時々思い出して考えてしまいます。いつか自分なりの“納得解”を得られるように、春からまた心機一転、この学び舎で院生として学んでいきたいと思います。



―岩手のよさ―

塚　田　哲　也
（学校教育教員養成課程
保体サブコース　４年）

今回の「北桐」の原稿の依頼をいただき、岩手大学での4年間の学びを振り返ってみました。様々な場所で実際に見て学び、多くの人に支えられ、岩手のよさにもたくさん気付けた４年間だったと感じています。

私は高校まで育った地元を離れ大学で初めて岩手に来ました。岩手はおろか東北に来たのも初めての経験で、食べ物や生活の違いに最初は戸惑うことも多くありました。１年も過ぎると徐々に生活にも慣れ余裕も出てきて、新たな発見や岩手のよさにも気付くようになりました。

私がこの４年間の一番の学びだと思うことは、東日本大震災について学んだことです。テレビや新聞で岩手に来るまでも目にすることはありましたが、実際に岩手に来て沿岸地区に足を運んだり、被災した友人に話を聞くことで深く考えさせたりしました。震災当時や今後の復興・防災においても「教育」の果たす役割は、非常に大きなものだと実感しました。震災を通して何を学んだか、また今後震災を経験していない子供たちには何を学ばせなければならないのか、しっかり吟味し教育に生かしていかなければならないことがたくさんありました。「百聞は一見に如かず」という言葉もあるように、実際に東北に来て現状を見たり、当時の様子を聞くことで考えを改めたり、新たな知見も増えました。そして震災を通した、新たなつながりや、取組など復興の中で見えてくる岩手の良さも同時に発見することが出来ました。

もう一つ岩手の歴史を大学で学ぶ中で、伝統や昔の生活様式が色濃く残る場所だということも気付きました。私の地元やその他の地域と比較しても、殊に盛岡は伝統や歴史が現在の生活に反映されている場面が多く見られます。これらのことも教育において伝えていくべき内容だと学びました。グローバル化の進展に拍車がかかる現代においても失ってはならない文化や伝統があり、それらを守り伝えていく人々の姿を見て継承していくことの大切さを実感しました。

私は今後地元に戻り教職に就きますが、４年間岩手大学で学んだことで岩手のよさを知ることができ、更には私の地元の良さも再確認できました。教育において郷土愛や生まれ育った場所の良さを教えることは今後重要な内容であると感じています。岩手で見つけた岩手の良さを発信していくとともに子どもたち自身でも地元の良さを見つけていけるような子供の教育に携わっていきたいと思います。

学びの尊さ

一　條　友　希
（学校教育教員養成課程　学校教育コース
音楽サブコース　4年）

今から4年前の3月、まだ冷たい風が肌にまとう日にわたしは母と掲示板の前に立ち、自分の番号を見つけて静かに合格を喜んだ。自分が高校の時に憧れた、教師という存在になるためのスタートラインに立つことができたということに安堵する一方で、無限の可能性と多くの不安を予感する4年間の大学生活に対して少しの怖さも抱いていたことを覚えている。そんなあの日から風のように過ぎ去った4年間の大学生活もついに終えようとしている。岩手大学で過ごした日々の中で多くの分かれ道を自分で選択し、多くの学びに触れる中で自分自身を耕すことができたということを実感している今、わたしの心は深い自負と多くの感謝の思いで満ち溢れている。

わたしの岩手大学での学びは、深遠な叡智を多く与えてくださる先生方をはじめ、思いを共有する楽しさと喜びを教えてくれた友人などの素晴らしい出会いの中で積み重ねられた。さらに、音楽科での学びと吹奏楽部での活動という2つの場所がわたしにとって必要不可欠だったと感じている。学問として音楽の専門性を高めていくことができる学びの環境、音楽の楽しさを仲間と分かち合うことのできる場の両者によって、入学当時に感じた大学生活への不安や怖さが、音楽を学ぶこと、奏でることの楽しさと喜びに変わった。さらに、教育学部で過ごした日々の中で一番心に残るのは主免・副免教育実習だ。学びの楽しさに目を輝かせる子どもたちを目の前にして、いかにしてより学びの多い授業をつくるかを考え抜いた日々は、苦しい中にも数えきれない程の学びがあった。一方で、授業以前に教壇に立つということの自覚と責任の大きさを痛感した瞬間でもあったと感じている。未熟でまだまだ無知である自分と対峙しなければならない辛さを踏み台として、前の授業より少しでもステップアップできるようにということだけを毎日考えた必死の日々だった。短い期間ではあったが、教師としてのスキルと思考をたくさん吸収させていただいた貴重な経験だったと強く感じる。そして、子どもたちが将来咲かせる花の種を大事に育て続ける、教師という仕事の尊さを知った。

わたしが岩手大学に通った4年間の日々は、わたしを鼓舞しながらも温かく見守ってくれた家族の存在が大きな支えとなった。その感謝の気持ちを忘れずに、そしてこれまでの日々の中で学んだことや多くの経験を糧に、自分が憧れた教師の姿に少しでも近づけるよう学び続けていきたいと思う。

「経験と学び」

藤　本　あおい
（学校教育教員養成課程　学校教育コース
国語サブコース　4年）

「あっという間だったね。」

気付けば大学4年生になり、友がしみじみと口にした一言は、私のこれまでの大学生活を思い出させていた。必死の思いで入学したこの岩手大学で、私はどのような学びを得ることができたのだろう。思い返せば、入学当初は、その主体的な学びを要する大学のスタイルに戸惑いを隠せなかった。たくさんの情報が錯綜とする中で、必要なものを、身になるものをと、手探りで探っている状態だった。そんな中で、たくさんの経験を積み、学ぶことができたと思うことを二つ挙げたい。

一つ目は、教師という職業の魅力である。私は、小学校、中学校、特別支援学校、幼稚園と、4つの校種で実習を行った。実習期間中、先生方は、私の授業を見て、指導の仕方ではなく、子どもの思考に寄り添うための方法を教えてくださった。そして、授業で生かすための手段は、自分で見つけるのである。子どもが「学びたい」と願い、「どうしてだろう」と疑問を生むことができるのは、教師の力量次第であり、容易ではない。しかし、それを考えていくことが教師の楽しさであり、魅力であると感じた。また、子どもの成長する姿を見据え、学習や生活の指導を全力で行う先生方を見て、これが、私の理想であり、目標なのだと実感することができた。

二つ目は、コミュニケーションの大切さである。私は、ダンスのサークルに所属しており、先輩の紹介によって、京都のダンサーと交流したことがある。彼らは、東日本大震災復興チャリティーイベント「踊りなはぁれ」を主催していた。岩手大学生十数名が京都を訪れた際、彼らの温かいおもてなしのおかげで楽しい一時を過ごすことが出来た。こうした出会いから、方言や文化の違いを目の当たりにしたり、助け合うことで絆が生まれることを教わったりした。そして、人と人を繋ぐコミュニケーションが、人を救う手立てとなることを学び、これからの自分の生き方を深く考えるきっかけともなった。

大学生活において、こうした学びができ、自分を形成していると考えると有意義な4年間であったと感じる。これも全て、一緒に学び合える仲間、ご指導して下さる先生方、手を差し伸べてくれる先輩方、そして何より、陰で支えてくれる両親の存在のおかげだ。この学びを糧に、来年の春からは、社会人としてまた新たな一歩を踏み出す。自分の成長を促進できるよう、弛まぬ努力と周りの人への感謝を忘れずに、歩んでいきたい。

[思い出] ― 退官される先生方から ―

お世話になった教育学部の先生方３名がこの３月に退任されます。

学習指導要領の欠陥が学力不振を、さらに、不登校を生む
―教員養成29年の私の結論―

理科教育科
重　松　公　司

「傾向」も含め不登校中学生は１割で、最大の原因は学業不振だという。私は学業不振の原因は学習指導要領の欠陥にあると思っているので、理科の学力不振を考えたい。

ところで、学習指導要領の文章は、重文・複文で、複数の述語を含む。しかし、主語が一切ない。その上、「とともに」「が」などの曖昧な接続詞句を多用する悪文で、意味不明の文書である。

中学校理科の同要領は、エネルギー・粒子・生命・地球の４分野に分かれる。化学と物理学との区分が確立されているのに、物質科学をエネルギと粒子に再編する。こうして同要領は、自然科学の階層性を無視し、４分野を並列した結果、次に述べる普遍性・系統性を失った。

中学校理科第１分野の冒頭で、音と光を学ぶ。音も光も波だけれど、共通点にも、相違点にも触れない。

もし、音速が媒質の体積弾性率に比例し、密度に反比例することを示せば、固体・液体も含む音速を理解できるのに踏み込まない。光の屈折・反射を学び、凸レンズでの光の屈折を覚える。そうすれば、高校入試の凸レン

ズの問題を解ける。しかし、屈折とはどういう現象か学ぶことはない。

同要領の最大の欠陥は、20世紀初頭に人類が得た自然の最重要基礎である原子の構造を教えないことだ。「粒子」は、この欠陥の象徴だ。

金属の電気伝導・熱伝導・光の反射は、自由電子で説明できる。もし、子ども達が理解できれば、彼らは「わかる喜び」を得る。さらに、自由電子はなぜ金属にしかないのか、でも、なぜ全元素の７割が金属なのか、次々と疑問が出てくる。ここで、彼らは「わからないことがいっぱいある驚き」を感じる。

この「喜び」と「驚き」は、子ども達の学びの原動力だ。普遍性・系統性を欠き、これらの力を引き出せない学習指導要領から、学力不振が生じるのは当然だ。これでは、不登校もなくならない。

学習指導要領を廃止すべきだ。県教委は、高校までの教育課程を独自に編成すべきだ。この仕事に、学校長への出世コースを歩む指導主事を充てるとよい。困難だけれど教育課程編成の仕事はやりがいがある。こうして、学習指導要領の害悪を一掃したいと思う。

「食べること」は「生きること」

家政教育科

菅　原　悦　子

学生の講義や地域で開催される講演会において、私は“「食べること」は「生きること」”の フレーズを繰り返し強調してきました。毎日３回の食事を、どのような食べ物を選択し、調理して、だれと、どこで、いつとるのか？は、私たちの生き方そのものを映し出しています。私は家庭科の教員養成に関わって、このフレーズの意味を常に考え、教育の基礎としてきました。

私は運よく出身地である岩手県の大学に就職できましたので、２０歳代で戻る際に二つの目標をたてました。第一は自分が興味を持っている食品の香りの研究を継続し、博士の学位をとること、第二は岩手県に古くから伝わる食材や食文化の価値を再発見し、次世代へ伝えることです。大学教員としての任期を終え、その目標が実現できたかを振り返っているところです。

これまで学生をはじめとして多くの方々に支えられながら、味噌・醤油の香りの研究を継続し、第一の目標である学位を取得し、できる範囲ではありますが研究成果も上げたと思います。さらに、仕事と子育てを両立してきた経験をもとに、最近１０年は大学や地域における女性活躍に必要な意識啓発や環境整備を先頭にたって進めました。

しかしながら、第二の目標、特に次世代へ岩手の食文化を伝える活動は道半ばです。家庭科の食生活分野においても、近年、地域の食材や食文化を題材とする指導が明記されるなど、多様な分野でその重要性が認識され、ニーズも高まっています。一方、食文化の宝庫といわれた岩手県も有効な対策を打たなければ、この宝がなくなってしまう危機が迫っています。次世代へ、食材を生産する体験、調理する体験、味わう体験を通じて、先人から受け継いだメッセージを伝える必要があります。退職後は、岩手で“「食べること」は「生きること」”につながる日々の生活の大切さを伝えながら、第二の目標を実現したいと思っています。

前号９頁、名久井良明氏の文中に８ヶ所の誤入力がありました。訂正しお詫び致します。

57号「異人に出会う時」訂正

左	右
16行目マルコの口述を牢友	12行目俗文明化し低文化化
19 〃 客人には暖をとらせ	21 〃 J・J・ルソー
27 〃 ごとき人物が輩出し	23 〃 人口作為の陥没地帯
32 〃 衣食住や日常の次元	25 〃 異象を見、異言を

[事務局だより]

平成３０年度の北桐会は、６月に開催された評議員会において、新会長に小笠原義文先生が選出され、新たな同窓会活動がスタートされました。会務状況と事業計画・会計等が報告承認され、常任理事会を中心に具体的な計画を進めております。教育学部は今年度３月で新課程の学生が最後の卒業の時期を迎えます。教員養成に加えて、凡そ２０年間に渡り地域の担い手になる人材を輩出いたしてまいりました。今後は教員養成を主体とした学部になりますので、同窓会としても多くの教員の誕生を支援していくことになります。残念ながら学生定員の縮小により施設スペースの削減も求められ、厳しい状況が続いています。北桐会事務室は総合教育研究棟（教育系）４階の部屋にて澤田幸子さん（本部事務担当）が執務をとられています。会員の皆様のお越しをお待ちいたしております。本年度は新会長の提案で、学内勤務の同窓生に声をかけ北桐会への理解を深めていただく会を検討しております。必ずや若い人たちの力が集結する機会が得られることと期待しております。

現在、支部活動の推進を勧めているところですが、仙台支部がまもなく立ち上がる段階にあると伺っています。他の地域におかれましても新たに支部を結成される場合は、結成の詳細につきまして本部までお問い合わせいただくよう重ねてご案内いたします。当会の名簿に掲載されている情報と準備金を補助させていただきます。

今後とも、皆様からの一層のご理解ご協力をいただきますようお願い申し上げます。

追伸、本年度の卒業生・修了生と学長との懇談会（第１２回）は下記の日程で開催される方向で検討されています。同日は午後から岩手大学創立７０周年記念の記念講演会及び記念祝賀会が予定されております。７月頃には岩手県内在住会員を中心にご案内が届くことになりますので、ご出席いただきますようお願い申し上げます。

○主催　岩手大学　岩手大学同窓会連合

○日時、開催場所

日時：１０月１９日（土）１０：００～１２：００

場所：岩手大学総合教育研究棟（教育系）

北桐ホール

連絡とお願い

○同窓会活動へのご意見ご提案をお待ちいたしております。

○新たな卒業生・修了生の情報と、会員の住所変更・改姓や会報の届いていない会員等のご連絡は、本誌折り込みはがきを利用して必ず事務局へご連絡下さい。

○恩師や会員のご逝去の際には弔電をお届けすることになっております。もし情報が入りましたら出来るだけ速やかに事務局までご連絡下さい。

○ 発行協力費がたくさん寄せられています。ご協力いただきました会員の皆様に厚く感謝申しあげますとともに、何卒引き続きご協力の程お願いいたします。

○同封しました岩手大学同窓会連合会報をご覧下さい。

○新たに支部を設立する地域がございましたら、本部までお問い合わせください。名簿等の資料と、設立準備金を提供いたします。

（藁谷）

編集後記

おかげさまで「北桐」58号が完成し、会員の皆様にお届けすることができます。お忙しい中、快くご執筆・ご協力いただいた方々に、誌上より厚く御礼申し上げます。

今回の特集は「私とフィギュアスケート」と題し、岩手大学総合科学研究科の佐藤様に今までの歩みについて寄稿いただきました。色々な偶然が重なっての現在があること、そして今まで多くの「学び」を大切にされていることが伝わってまいりました。そこで自分が夢や目標に向かって「学び」を継続してきたかといざ振り返ってみると…本当に頭が下がる思いです。そしてこの岩手大学から今後も更に多くの分野において卒業生が活躍されることを願ってやみません。

北桐は今後も、皆様のご協力を支えに、誌面の充実に尽くして参りたいと思います。なお、会員の皆様にご協力いただいた発行・発送協力費は、発送経費の一部に充当させていただいております。引き続き、ご理解とご協力をお願いいたします。

最後に、会員の皆様のますますのご健康とご活躍を、編集委員一同お祈りし、編集後記といたします。

（裕）

北　桐　第58号
平成31年３月16日発行
●発行　岩手大学教育学部同窓会（北桐会）
会　長　小笠原　義　文
〒020-8550　盛岡市上田三丁目18－33
TEL・FAX　019－621－6618
http://www.edu.iwate-u.ac.jp/hokutou/link/index.html
hokutou@iwate-u.ac.jp

●編集　北桐編集委員会
委員長　吉　田　裕　一

●印刷　㈱　杜　陵　印　刷
〒020-0122　盛岡市みたけ二丁目22－50
TEL　019－641－8000
FAX　019－641－8085